

# 立冬から大寒へ



## 冬のきのこ

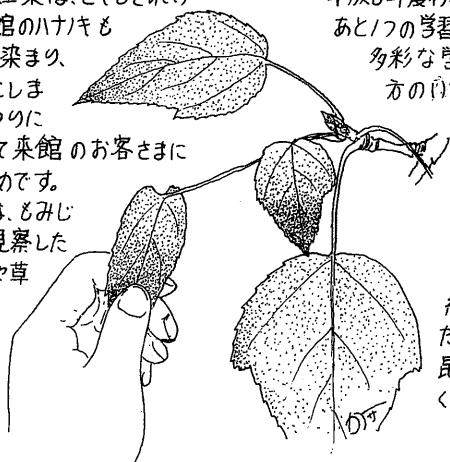
(平成8年12月7日)

医王寺のフジの老木にエノキタケが生えているので、さっそく出かけていきました。幹の芯が枯れて、そこから毎年生えるそうです。まだ幼菌でしたが、数日後には横山館長の胃袋に入ってしまった。天然のエノキタケは、スーパーに並ぶ栽培品とは似ては似つかぬ姿ですが、鼻を近づけると、同じきのこなんだと納得できるはず。

## 「秋の紅葉を楽しむ」学習会

(平成8年11月9日、61名参加)

今シーズンの紅葉は、とてきれいでした。博物館のハナキもみごとな紅葉に染まり、さっそくおし葉にしました。もみじまつりに紅葉カードにして来館のお客さまにプレゼントするためです。この学習会では、もみじになる植物を観察したあと、美しい葉や草の紅葉カードやおみやげにしました。



## 博物館ロビー

(平成9年1月4日)

中央構造線のアフリカや化石など、石の展示があり、しかも暖房がないので外からロビーに入るとキンッと身がしまる感じがします。そんなとき目に入るのが、さりげなく花びんにさされたロウバイの花です。淡黄色の花びらといい香りは、心なごみます。この一角は四季折々の花が、やさしい解説で迎えてくれます。加藤(等)先生の心がかりです。



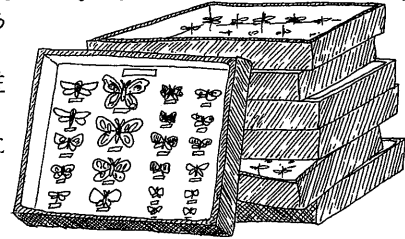
ロウバイ (ロウバイ科) 中国原産



学術委員会会議 (平成8年12月22日)

博物館の学術面を支えていただく学術委員の先生方が一堂に会し、平成9年度の行事の企画を話しあいました。毎回満員で人気のある野外学習会、夏と秋の特別展。そして、館報に載せる論文のことも、さまざまです。

平成8年度行事も残すところあと1つの学習会のみです。多彩な学術委員の先生方の力も変わらぬ指導と支援に感謝しています。



## うれしい奇贈標本

展示室の昆虫標本は光線の影響で、どうしても退色してしまい、時間(年数)がたつとだんだん白っぽくなってしまいます。友の会員のIさんは当館の昆虫標本を見て、自ら採集した昆虫の分類(29科149種)を奇贈してくださいました。展示ケースの中で新鮮な標本がひとときわらってみえます。

## はがつかはら祭り No.41

1997. 1

### 「バードウォッチング」学習会

(平成8年12月14日、102名参加)

I部: 早朝8時から、鳳来寺小学校親子サワリのみなさん(51名)でおこないました。学校から海老川までのコースで、カワガラスなど19種、120羽に出会いました。緒方先生によれば、観察を1年続けると、100種以上見られるだろうとのこと。ぜひ挑戦してほしいと思います。II部: 10時から博物館でおこないました(57名)。午前中の観察は、参道コースと門谷高徳コースに分かれて出かけ、樹林性、草地性の鳥など、あわせて24種が確認できました。午後は、出会った鳥の確認(鳥あわせ)と、その鳥に関する様々な話を聞きました。最後に保護中のコハズワのスライド映写など、もりだくさんの内容でした。



東三河の中央構造線の話 (平成8年11月14日)

東三河地区消防関係者会議に招かれて、館長が講演をしました。中央構造線の安全性については、誰もが関心のあるところです。この地方での活動の証拠はありませんが、日本全体からみると、いたるところに断層があり、安心はできません。

### 東三河地区消防関係者会議



## 冬の博物館

見学者の少ないこの時期は、博物館にとって1年のまとめをする季節です。調査研究したことや活動内容を館報に執筆したり、その編集。送られてくる文献類や奇贈資料の整理など、とておぼろげで手間がかかり根気のいる仕事です。現在まとめている館報26号は、地学・動植物全部門にわたって、発知初の特長類目録など6つの調査研究報告がのぞき予定です。3月末発行に向けて取りくんでますので、お楽しみに!

## 冬の使者

(平成8年11月4日 初見)

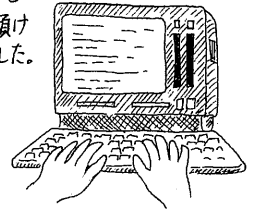
この鳥を庭先などで見かけたら、そろそろ冬の到来です。地元の人たちは、モンソキドリと呼んでいます。遠く中国西部やロシア方面から渡来する冬鳥で、4月には、ほとんど姿が見えなくなります。おじぎをするように頭を下げ、尾をふるような動作をします。昆虫や木の実に好んで食べています。



ショウビタキ(ヒタキ科)

## 富山からの紹待状 (平成8年11月21日)

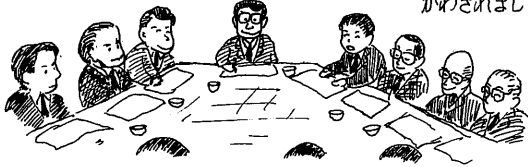
NHKラジオの早朝の人気番組「人生読本」に館長が出演し、全国から反響がありました。リスナーのひとりに、富山県大門高校の先生がみえ、番組の内容に感銘し、「ぜひ、うちの生徒に話をしてほしい」との依頼がきました。小学生のときの地質と鉱物の会や様々な先生たちとの出会い。滝をとおして水問題や自然破壊の問題など、熱心に耳を傾けてくれました。



# 冬から春へ

## 博物館運営審議会 (平成9年2月20日)

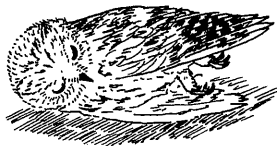
博物館の円滑な運営をはかるために、なくてはならない会議です。町議会議員、学識経験者等で組織されています。今回は、平成8年度事業報告、9年度事業計画が審議されました。そして将来の博物館のあり方についても意見がかわされました。



## 受難の季節

冬は野生動物にとって、とてむきしい季節です。博物館に連絡があったり、持ち込まれただけでもこの時期に6件の野鳥の事故がありました。

- 1月18日 オオコハズクが下吉田 紺屋平の杉本五郎さん宅の風呂場に飛び込み保護。翌日、無事放鳥。
- 2月1日 オオコハズクが一色棒夫の川合秀典さん宅の度先で動けなくなっているところを保護。手当のかいなく死亡。
- 2月21日 オオコハズクが乗本蔵平の畑で、鳥よけの網にからまっているところを浅井友治さんが見つけ、はすしてやめたがすでに死亡していた。
- 2月27日 フクロウが池場の畑で、猿よけの網にからまっているのを、大地芳雄さんが見つけました。死亡していた。
- 3月3日 博物館のガラスに激突して死亡したウソ(♀)をちょうど見学に来た鳳来寺高校1年の荒川 山田 酒井さんが見つけ知らせてくれた。
- 3月9日 ハイタカが兄持の近藤正次宅の車庫で死亡しているのを発見。どれと食糧を求めての受難だったように思います。



## 学習会「冬の自然探検」

(平成9年2月8日、90名参加)

医王寺周辺の遊歩道を利用しておこなわれました。雑木林の残る林の中で、常緑樹、落葉樹、シタヤコケ、そしてキノコの観察をしました。

昼に豚汁で体を温めた後、学術委員の各先生の講話に耳を傾けました。

1kmとない短いコースでしたが、記録できただけでも73種の植物と10種のキノコがありました。



鳳来寺山自然科学



博物館



## 春の声

(平成9年3月5日)

昨年より6日おくれたウグイスが門谷の谷で鳴きました。今年は例年よりずいぶん暖かな春の始まりですが、このウグイスは少々のんびりなようです。

## 最後のセツブンソウ (平成9年2月24日)

テレビなどで紹介されると、人がどろとおしかけてこの小さくてかわいい植物は、逃げることもできず、おびえていたのではないのでしょうか。

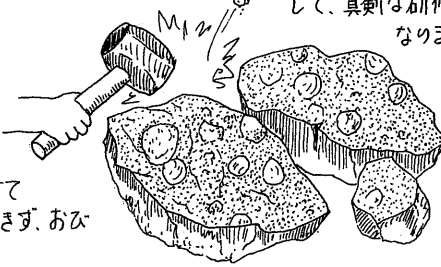
ダム建設が着々と進む大島の自生地をのぞいてみました。わずかに2株を見い出せるのみでした。

数年後には確実に消える運命です。

## 愛知県博物館協会自然科学部門研修

(平成9年3月27日・設楽層群第三紀の海産化石球集と標本作り)

館長が講師になり、新城市有海～博物館でおこないました。県下の博物館学芸員や教員が参加(23名)して、真剣な研修になりました。



## 博物館で議員交流研修会

(平成9年2月20日)

作手村と鳳来町の議員さんが博物館にみえました。学習室で当地域の地質や断層などについて館長の講話を聞いたあと、館内の見学をしてもらいました。博物館活動を理解してどうよ機会になりました。



## スギ花粉

(平成9年3月1日)

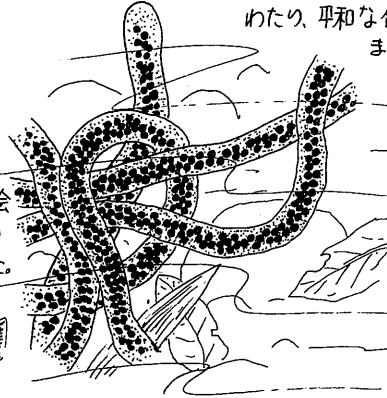
昨年の3～4倍の花粉が飛散することです。博物館の窓から見てみると、向いの山の杉林から、風が吹くたびに黄色の花粉が舞うのが確認できます。展示ケースのガラスは、一日でうっすらと粉をまぶしたようになるほどです。花粉症の方には、つらい季節です。



## 武田勝頼本陣跡で“かわず合戦”

(平成9年3月7日～8日)

勝頼本陣のあった医王寺山のふもとに池で、2日間にわたり、平和な合戦がくりひろげられました。



戦のあとには無数の卵塊が残され、合戦のすごさが忍ばれます。寒天質に包まれた長い、ひも状の卵塊には、2500～8000個の卵がふくまれます。合戦の主はアズマヒキガエル(ヒキガエル科)でした。

## 少し早すぎた春 (平成9年2月9日)

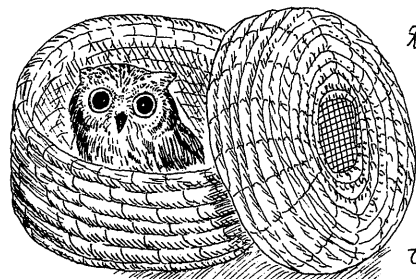
この日 門谷でヤマカガシ(ナミヒキ科)が日なたほっこをじていると連絡がありました。2日後には雪と降りましたし、春蟄(けいちつ)までには、まだ1ヶ月ほどあります。少々目ざめが早かったようです。



はげつかいだり No.42 1997.3

# 博物館のコハズク日誌

名古屋で保護されたコハズク (平成8年5月初旬)



フウゴに入れられたコハズク

名古屋市昭和区でコハズクが保護されました。鳥獣店を経営する早川敏雄さんの手厚い看護によって一命をとりとめることができました。

6月5日、リハビリのために鳳来寺山の博物館へやってきました。(はくぶんかんだよりNo.38参照)

## コハ隠れの術

警戒心の強いコハズクは、コハウスへ移ってから、日中ほとんど木の葉陰に隠れるようにして、じっとしています。こちらの目が慣れるまで、なかなか姿を見つけることができません。体の色は木の幹とほとんど同じですし、体も細くしているので初めての人、位置を教えてあげても、わからないほどです。



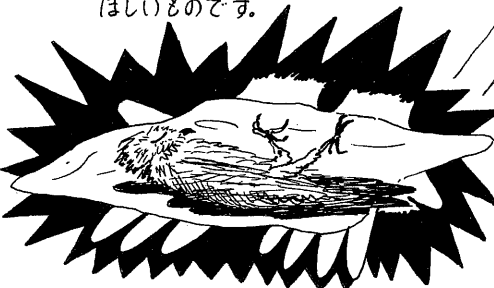
## お気に入りの場所?

(平成8年6月15日)

とりあえず2m四方ほどの部屋(保護室)に移すと、フクロウ用の大型の巣箱が気に入ったのか一日中、出入口にとまってじっとしています。でと決して箱の中には入ろうとしませんでした。

フッポーン  
仏法僧と鳴いた! けど...  
(平成8年8月20日、12月31日、平成9年1月16日)

つぶやくほどの声で鳴きました。門谷の谷に響きわたる大きな鳴き声ならばみんなが驚いたにちがいない。幸運にと聞けたのは隣家の日比野さんと、博物館職員だけでした。今年こそは、仲間にとどく声で鳴いてほしいのです。



## コハウスが死んでしまった?!

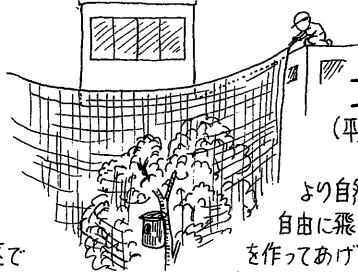
(平成8年12月5日)

前夜から降り始めた冷たい雨が気になって、その朝近づいてみました。心配が適中して、雨に体温をうばわれ、飛べなくなりました。体を温めてやろうと、さらに近づいても逃げる元気もないようです。9オ'clockにぐるぐる部屋に運ぼうとすると、少し抵抗した後、目をむきつりつりと動がなくなりました。死んでしまった!! こちらの心臓が止まるほどのショックでした。しかし、冷静になって顔を近づけると、わずかに鼓動が伝ってきました。急いでストップで体を温め、懸命に処置した結果、正午頃「クー」という声と共に箱の中で起きあがることができました。感激と安堵、命のはかなさと重さをすしりと感じた、長い長い一日でした。

## コハウス

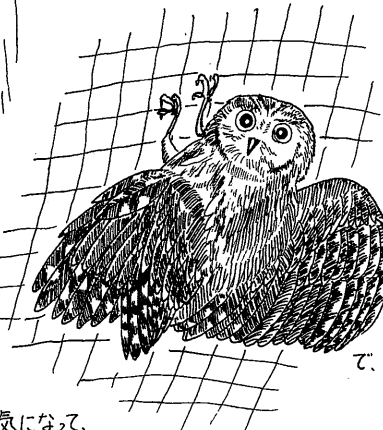
(平成8年8月8日)

より自然に近い状態で自由に飛びまわれる空間を作ってあげようと考え、中度にこしらえました。巾、奥行7m、高さ8mで内にはペカンの木がまるごと、すっぽり入っています。ちょうど大きなカヤをつた感じでした。



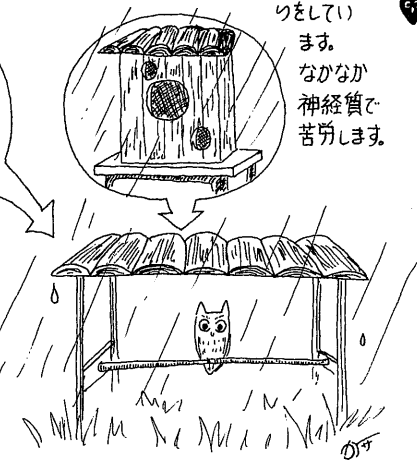
日光浴

秋になり気温が下がってくるとコハウズのとまる位置がだんだん高くなってきました。それまで葉陰にかくれるようにしていたのが日当りのよい場所で、体をふくらませて太陽の熱をいっぱい吸収しているように見えます。それと、冬を前に渡りの旅に思いをはせているのでしょうか。



## おこるとこゆいッ

あまり近づきすぎると、クチバシをカチカチッと鳴らし、羽を思いっきりふくらませ、羽角どらせて体や頭を左右にゆらして相手をいかくします。逃げるときは、サッと飛びあがり、ネットにへばりついて、まるでコウモリのようなポーズで、こちらをにらみます。



## 食欲旺盛体重増加

平成8年7月5日の体重60g。その後コハウスに放鳥。運動量も増えた為か、エサを自分の体重の半分ほど食べるようになりました。12月6日の測定では80g。ほぼ平均的な体重にまで回復しました。平成9年3月21日の計測では83g。毎日ほとんどエサを残しません。不消化物はペリットとして口からはき出します。もちろん糞も良好です。

フワフワと見ると、ピンセットできれいに取り除いてやると、全く無抵抗。かゆいところに手がとどいた快感か、されるがままに、うす目をあけて、じっといり子にしています。



# はくぶんかんだより No.43 1997.4

雨やどりしてホッ (平成9年3月28日)

米雨で死にそうになった苦い経験から、安心して雨やどりできる場所の必要性を痛感しました。初めは、大きな巣箱形の小屋を設置しましたが、一度も使ってくれません。逃げ場がないのが不安なのかもしれない。次にいつ使うとまり木の上にカサをさしてみました。しかし、一時的にとまることはあっても、長くはいられないようです。カサに当たる両者が大きいので、気になるのかもしれない。次に周囲がまる見えの屋根付きのとまり木を作ってみました。すると今度は安心したのか、大雨になると必ず中に入って雨や



りをしてい  
ます。  
なかなか  
神経質で  
苦勞します。

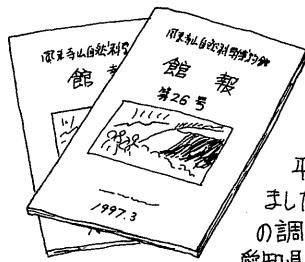
## 気持ちいいのかな

(平成9年3月4日)

厳寒期の室内生活でクチバシのまわりと足指にびっしりと重いほどアカ(エサ)から付く汚れ)がこびり



# 春から初夏へ



博物館館報 26号  
(平成9年3月28日刊)

平成8年度の館報ができあがりました。内容は学術委員、博物館職員  
の調査研究報告と事業報告です。  
愛知県初のヤステ目録をはじめ、鳳来寺山  
北東部の砂岩脈、医王寺断層の新露頭、鳳来寺山の継管束  
植物、鳳来町のきのこ(1)などカラー頁も交えた見やすい編集  
です。興味のある方は、ぜひ読んで下さい。



博物館学術委員総会 (平成9年4月19日)

4月から平成9年度の博物館事業計画にそとづいて  
活動を開始しています。中でも教育普及活動は、たいせつ  
な事業のひとつです。

野外学習会、特別展は、特にそれぞれに専門の学識  
をもちた学術委員の先生方に指導や支援をいただいで  
います。博物館の全委員一同に集まらう、学習  
会、特別展、館報への執筆など、さまざまな打合せ  
がおこなわれました。人気の学習会もこのように  
して決まります。

春～初夏のキノコ (平成9年4～5月)

アミガサタケ  
長篠 4.11



マツオウジ  
能登瀬 5.8

シメジ  
アミガサタケ  
県民の森  
4.9



ムシナタケ 長篠 5.15



ハルシメシ 能登瀬 5.8

キノコといえば秋、と思っている人が  
多いと思います。しかし、きのこは  
一年中見ることが出来ます。

ただし、季節によって種類がちがって  
くるものもあります。

アミガサタケ、シメジ、アミガサタケ、ハルシメシなどは  
春にだけ顔を出します。マツオウジやムシナタケ  
は秋まで見られます。

雨の後などに注意  
してさがすと、必ずキノコ  
に出会えます。



モリアオガエル初産卵  
(平成9年5月7日)

今年は例年になく早い春のおとすれ  
と思っていたら、モリアオガエルも  
気が早く卵を生みました。鳳来寺山  
中腹の医王院近くの池が毎年いちばん早い  
ので、いつか気をつけています。昨年は5月31日  
でした。今年は24日も早い産卵で、昼間でした。  
同日、博物館でも産卵。たのしい話題に  
なりました。

コハズク鳴き声調査開始  
(平成9年5月2日～)

鳳来町でまだ「仏法僧」の聞ける  
ところはあるのでしょうか。期待と不安のまじる  
なか、夜な夜な鳴き声を求めて山へ入りました。  
広報やほくぶかんだより、オフア放送などで町の  
人や友の会みなさんにも協力をお願いしたところ  
たくさん情報をお寄せいただきました。  
現在3ヶ所で鳴き声が確認できています。  
6月に入ると聞きにくい季節になってきますが調査は  
続けています。情報があたら、連絡してください。



鳳来寺山の生きものを学ぶ会  
(平成9年5月24日・雨・80名参加)

朝からの雨で県民の森から、急きょ博物館へ  
会場変更。参加のみさんには大変めいれくを  
かけてしまいました。でも一言の不平もなく、雨でも  
参加の熱心さに敬服しました。  
雨中のバードウォッチングでは8種の野鳥を確認、  
雨やどりしなからの質問会。

鳳来寺山自然科学博物館



第3回友の会総会開催  
(平成9年5月11日)

平成9年度の友の会総会がたのしく  
おこなわれました。役員は

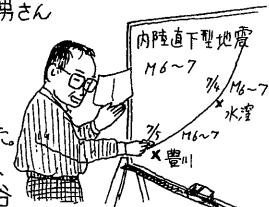
会長：小椋克好さん、副会長：大嶽幸男さん  
会計：山田恵一郎さん、監事：竹え内昭夫さん、  
大橋滋子さんが再選されました。ひきつづき  
がんばっていただけます。そして平成8年度の報告  
と9年の計画が承認されました。



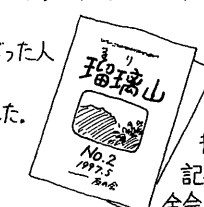
こん親会は五平もち  
作り。自分でぎった  
もちに特製みそダレをつ  
けて焼き、あつあつを  
いただきました。



平成8年度の学習会にがんばった人  
の表彰もおこなわれました。  
館長がひとりひとりに賞状と記念品を手渡しました。  
みんなとてもうれしそうでした。



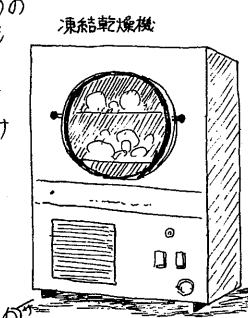
特別講演は、  
学術委員の菅谷  
先生による「地震と災害」についてです。  
内容は「るく山」No.3でくわしくお知らせし  
ます。早く知りたい人は直接先生に聞き  
ましょう。



友の会報「瑠璃山」  
No.2も総会にあゆ  
せて発行されました。  
井波先生の講演、会員の  
記事が載って充実の内容。  
全会員に配布しました。

新兵器登場 (平成9年5月30日)

きのこなどのようにやわらかく、くさりやすいもの  
の標本作成は大変です。今までは液浸か、乾し  
シタケのように乾燥するしかありませんでした。  
液浸は、ビンと薬品が必要で、標本と長いあ  
いだに白くなったり、くすんだりします。  
乾燥はしわしわの  
ミラになって元の形  
がわかりません。  
この機械は凍結  
した標本から水分だけ  
をぬき取り、ほとんど  
原形のまま標本にする  
ことができるすくねの  
です。魚や鳥もどろん  
できます。



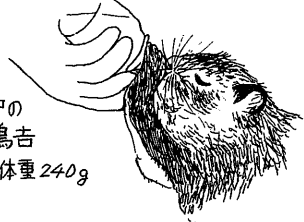
午後はスライド  
を使ったり、標本  
で、野鳥、水生  
昆虫、貝の話。  
そして最後  
に顕微鏡で  
チョウの羽の  
鱗粉の観察  
もしました。

# 水無月の話題

亀太郎と鶴吉のこと  
(平成9年6月23日)

玖老勢の民家の屋根裏に巣をつくり、生まれたばかりのムササビの赤ちゃんが運び込まれました。育てる親がいなくなったためです。

職員(森下)が母親がわりにめんどろをみることになりました。ちゃんと育て長生きするようにと鶴吉(104g)、亀太郎(92g)の名をつけましたが、虚弱だった亀太郎はすぐ死して。片々鶴吉は、毎日ミルクにむしゃぶりついて順調のようです。無事成長し、グライダーのように飛ぶ日を夢見ています。



授乳中の鶴吉  
7月13日 体重240g

「海岸の地形と化石を学ぶ」会  
(平成9年6月8日・晴のち曇り・62名参加)

蔵王山で瀨美半島の成り立ちや地形を観察した後伊古部、高塚間で化石の観察と採集をしました。

70万年~30万年前の貝化石で、ヨコハマチヨ)ハナカイがざくざく採れました。ここは河川や浅い海(沿岸・内湾域)の泥炭や砂、泥がたまってできた地層です。時間を忘れて採集しました。こわれやすいので、紙にくるんで大七刀に持ち帰りました。



うれしいこと悲しいこと

6月29日夕方、オオコハズクが元気に飛び去っていきました。5月27日、連合の道路に飛べずにうずくまっていたところを助けられたのです。博物館で保護し、順調に回復したので、同地内で放鳥することにしました。保護した原田りつさんととてもうれしそうでした。

一方、同じ山谷でアカショウビンがガラスに激突死(6月7日)、副川でオオコハズクの幼鳥がへい死(6月12日)、玖老勢でトラツグミ(?)の幼鳥へい死(6月18日)、豊川インター付近でフクロウ事故死(4月24日)、鳳来寺山パークウェイでフクロウの幼鳥へい死(6月24日)など、悲しい出来ごとにもたくさん出会いました。

夏の特別展「自然研究のたのしみ」  
(平成9年7月20日~8月31日)

自然の調査や研究は、どのようにしておこなわれているのでしょうか。とても興味があります。野外調査の方法やセッ道具、スケッチや標本の作りかなどを紹介します。地学、植物、動物の分野で、学術委員の先生の手づくりの展示です。専門の研究の一端ものを紹介します。夏の自由研究の参考にどうぞです。



鳳来寺山自然科学博物館

鳳来町のモリアオガエル

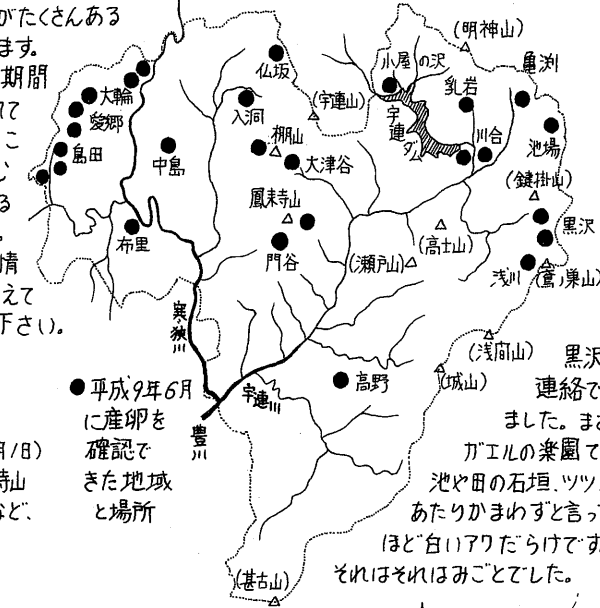
「モリアオガエルの生息分布を調べよう」と町の広報で呼びかけました。さっそく連絡をいただいたり、博物館員も出かけて生息の調査をしました。

町全域を走りましたが、まだまだつぶさに見て

(いません。調査

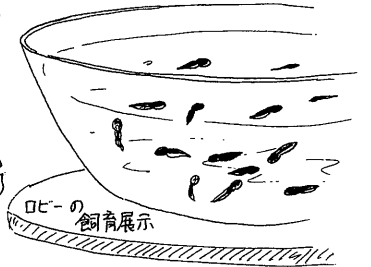
とれかたくさんあると思います。また、期間と限られているので、これから産むところがあるはず。新しい情報をおしえて下さい。

●平成9年6月に産卵を確認できた地域と場所



台風7号とモリアオガエル  
(平成9年6月20日)

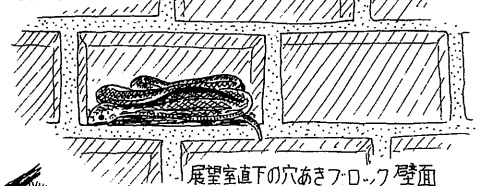
6号に続いて7号が上陸。東海地方を縦断しました。この時期の上陸は、めずらしいそうです。強い風は前日に産んだ卵塊を吹き飛ばしてしまいました。彼らにとって予期せぬ災難でした。地上に落ちた卵は池にとどし、今はオタマジャクシになって元気に泳いでいます。



満腹・満足  
(平成9年6月12日)

黒沢の請井さんからの連絡で産卵状況を見に行きました。まさにそこはモリアオガエルの楽園でした。池や田の石垣、ツツジや竹などあたりがまわると言っているほど白ひらだらけです。それはそれはほみごとでした。

朝、開館のために3階の窓をあけると目の前の壁にアオダイショウが身動きせずにくっついていました。よく見るとお腹がポンポンにふくらんでいます。近くにはカラッポになった小鳥の巣(セグロセキレイ)がありました。ヒナを丸のみしてしまっただけです。コンクリートの3階まで登ったヘビの執念と、生きるきびさを教えられました。



展望室直下の穴あきフロック壁面

モリアオガエルもヘビの大好物です。親はもちろん卵塊にも頭をつこんで中身をきれいに食べてしまいます。生き残れたもののみ子孫を残せます。

ササユリ

ほんとに美しい花ですが見られる場所はわずかになってしまいました。木を伐採したあとにササユリが復活したところもあります。心ない人にぬき去られてしまいます。自然が造りだした美をひとり占めしてはいけません。持ち帰ると、翌年はせったい花を楽しめないのですから。



多利野 97.6.18



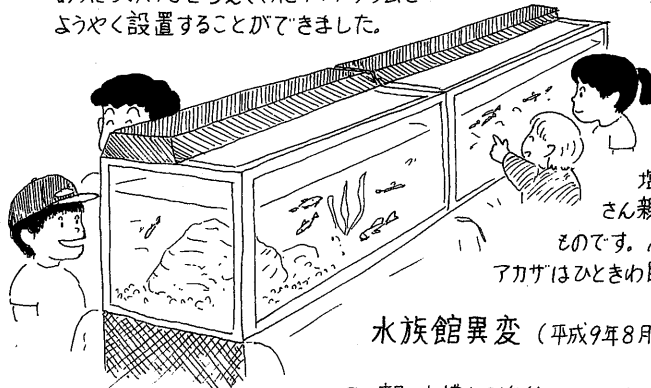
はげつからたつ No.45 1997.7

# 夏の話題

はがわからだもの No.46 1997.9

## ロビーに超ミニ水族館誕生 (平成9年8月10日)

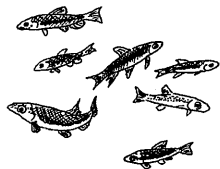
生きた水生生物を見もらうために、長い間あったらいなど考えていたアクリウムをようやく設置することができました。



水族館異変 (平成9年8月14日)

この日の朝、水槽をのぞくと、ほとんどの魚がお腹を上にして浮んでいました。かううして生き残ったカワヨシボリとカワムツも苦しそうです。原因は、前夜、職員(加藤)が閉館時に水の過剰の電源を切って帰ったためでした。魚たちには大変かわいそうなことをしてしまいました。こんな失敗は2度としないよう、深く反省しました。

## 水族館復活 (平成9年8月21日)



友の会会長の小椋克好さんと錦可くん、吉明くんのおかげで、アクリウムに元気に泳ぐ魚たちの姿がもどりました。水槽のそうじまでしてくださり、感謝、感激です。以後、気持ちよさそうに泳ぐ魚たちに、訪れた人たうも立ち止って見入っています。

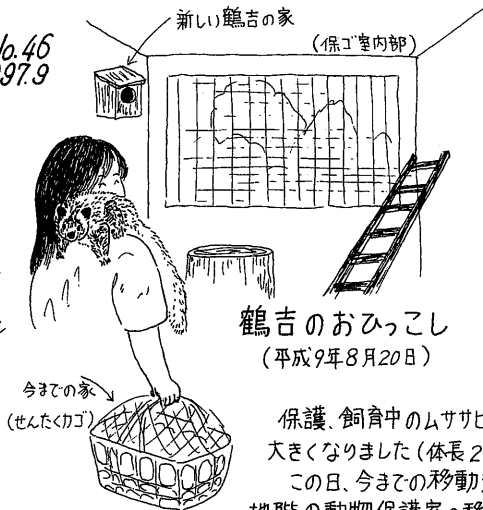
## 博物館の職場体験 (平成9年8月8日)

新城市立東郷中学2年の大嶽雄作君(友の会員)と中尾厚志君が体験学習にやってきました。普通の見学では見ることのない標本の整理を手伝ってもらうことにしました。

2人とも真剣に取り組んでくれたので、作業はかどりました。博物館のあまり目立たない仕事の一部に触れてもらいました。



最初にこの住人となったのは、巴川のアザ、カワヨシボリ、カワムツ、オйкаワでした。これらの魚は、塩瀬の林宗徳さん親子の協力によるものです。ふだん見られないアザがはびと目立っていました。



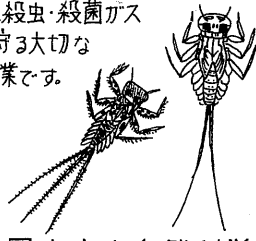
鶴吉のおみっこし  
(平成9年8月20日)

保護、飼育中のムササビと、すいぶん大きくなりました(体長29cm、体重650g)。この日、今までの移動式の家から、地階の動物保護室へ移すことにしました。「ひとりてさみしくな(り)かなー」「今ごろ泣いているんじゃないかな」と職員(森下)は心配で、夜中に何度かのぞきにきたり、家につれていったりもしていたようです。もちろん、今はひとり(匹)でだいじょうぶです。



植物標本庫のくん蒸  
(平成9年9月3~5日)

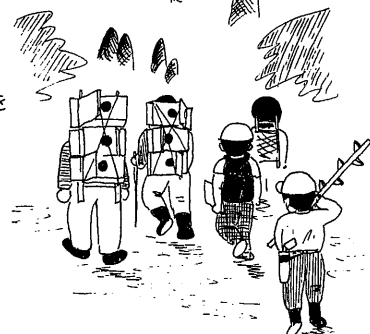
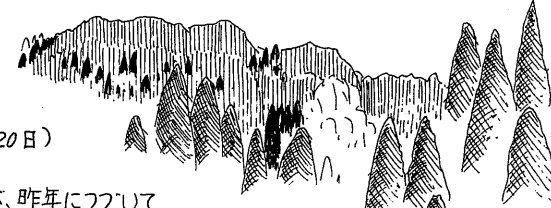
植物標本庫には、故鳥居喜一先生のさく葉標本を中心に約5万点が収蔵されています。我館の大切な宝物です。その大事な資料を虫やカビから守るためのくん蒸です。専門の業者が、ガスがとれないように窓などに目張りをし、室内に殺虫・殺菌ガスを送り込みます。標本を守る大切な作業です。



鳳来寺山自然科学博物館

## 使ってください (平成9年7月20日)

門谷2/世紀の人たちが、昨年についてコリハズク用の巣箱掛けをおこないました。これは、博物館も協力しています。門谷の谷にコリハズクの鳴き声がもどること、巣箱を使ってくれることを期待して、今後ともつづけていく計画です。



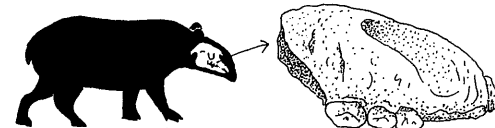
残念だった学習会  
(平成9年7月13日 雨)



「夏の植物を学ぶ」会は、毎年恒例になっている観察会で、いつも暑い時期なのに人気があります。今回、みなさんにお知らせしたところ、114名の参加申し込みがありました。私たちが資料の印刷部数を急ぎ増やして準備しました。ところが前日からの雨がやまず、やむなく中止としました。この10年間で初めてのことで、楽しみにしていたみなさんには、うらめしい雨となりました。

## 川の生きものを調べる (平成9年8月23日、晴)

今回の学習会は豊川の主流、寒狭川を会場に選びました。サイクリングターミナル(布里)前の大きな川は、採集には広すぎましたが、泳ぐには最適でした。魚類はカマツカ、カワムツ、シマドジョウ、カワヨシボリの4種、水生昆虫は16種が確認できました。水質は「もちろん」きれいな水。でした。(71名参加)



バクの上あご化石  
(平成9年8月19日)

昭和28年、<sup>7</sup>玖老勢の分野で、設楽層群から発見された化石です。バクの化石は、日本ではさかめて少なく、大変貴重なものです。紛失しては大変なので、今回、精こうなレプリカ(複製)を作りました。展示されているのはレプリカで、本物は大切に保管してあります。



## 鍾乳洞と豊川の地形 (平成9年8月3日、晴 49名参加)

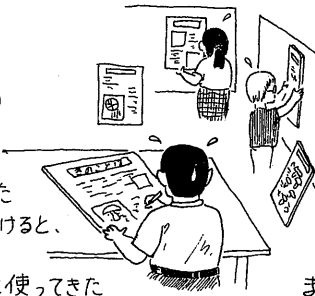
スセ シアチ 豊川沿いの地形、豊橋市嵩山の蛇穴を観察しました。バス利用のため定員からあふれた方が多く、ヒカが傷みました。鍾乳洞はひんやりして別世界でした。



# 秋ときのこと博物館

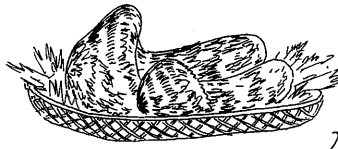
きのご展準備  
(平成9年9月7日~20日)

今年は何年よりも半月早く開催したいと考えていたので、夏の特別展示を片付けると、すぐに準備にとりかかりました。また、今までずっと使ってきたパネル類も、全面改訂することになりましたからおお忙しでした。これまでも館職員の手作りの展示にこだわってきたので、看板作り、パネル作成、写真、資料展示、レイアウトなど、すべて自作にしました。限られたメンバーで、連日準備に没頭しました。



第9回きのご展開催  
(平成9年9月21日~10月31日)

きのご展の主役は何といっても本物、実物です。どんなに詳しく説明した文章や写真でも、実物には及びません。実際に手にとって触れたり、臭いをかいたりかじったり、ひまょうな色あいや、細かな特徴まで確認できます。しかし、館員だけで広い展示台をうめるだけのたくさんの標本を集めるのは大変です。今年も友の会員やきのご好きな人たちの協力で、期間中約320種のきのごを展示することができました。支援の方すべてをここに紹介したいのですが、紙面が足りません。ちなみに、採集と展示で、のべ35名が協力。標本提供者119名でした。さらに、きのご相談が118件。そして期間中、1,942名の方が見学にみえました。



高価な寄贈品  
(平成9年10月16日)

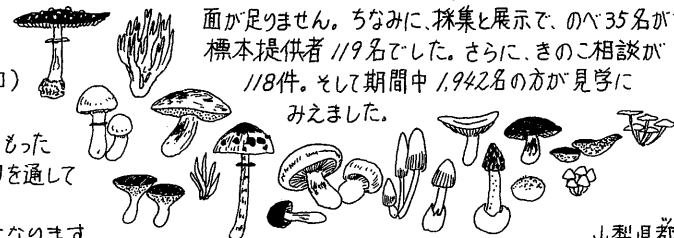
きのごの王様といえばマツタケです。最近では、外国産も多数出まわって、手に入れやすくなったとはいえ、まだまだ高いことに変わりはありません。地元産ともなる貴重品で、見つけるのは至難の技です。そんなマツタケを長篠の伊藤忠志さんが寄贈してくれました。数年前、展示しておいたマツタケを失敬された苦い経験から、今度は、凍結乾燥標本にして、ケースの中へ展示することにしました。今年購入した標本作成器が大活躍しています。



「秋の紅葉を楽しむ」会  
(平成9年11月9日 晴 65名参加)

きのごを学ぶ会  
(平成9年10月12日 晴 94名参加)

きのごを学ぶには、正しい知識を持った講師のいる観覧会などで、実物を通して学ぶのがいちばんです。この学習会は、今年で10回目になります。毎年欠かさず出席し、今ではきのごに詳しい会員が何人もいます。



黄柳野小学校できのごウォッチング  
(平成9年10月6日 晴 全校生徒)

ここは学校の裏山が即、きのご観察のできるすばらしいフィールドです。この日は、みんなで26種を見つめました。そして、19日には親子遠足で「きのご展」も見学してくれました。

99きのご展裏はなし

採集した野生きのごの鑑賞寿命は、せいぜい1~3日間です。時間とともにしなびたり、とけたり、腐ったり、さらにはキノコバエなどの幼虫(ウジ)がはいり出てきて、あたりを徘徊し、悲惨な状態になります。片づけは、においとウジとの戦いで、女子職員は泣いています。

京都のきのご展  
(平成9年10月18日)

日本で最大のきのご同好会で、菌類研究の第一人者が多数入会している関西菌類談話会の、第7回きのご展が、京都府立植物園で開催されました。17日から3日間で、この日視察に行きました。展示会場には、ボランティアの会員が常時10名ほどいて、見学者に丁寧に説明してくれます。会場裏では、採集し持ち込まれたきのごを、すべて形態と、顕微鏡を使った胞子の観察により、同定していました。その上で展示されます。とても勉強になりました。

ムササビの教科書

小学4年の国語教科書に「ムササビのすむ町」という教材が出てきます。山梨県都留市の小さな神社の森に住むムササビと人とのかわりかけが書かれています。「実物に勝るものはなし」鳳来寺小と鳳来東小の先生が館で飼養中の鶴吉に目をつけました。10月14日に鳳来寺小、10月24日に鳳来東小へと出張してきました。(保護者同伴=森下)期待どおりの役目を果たせたかどうか鶴吉は何と言ってくれませんでした。帰ると疲れたのか巢の中でぐすり眠っていました。

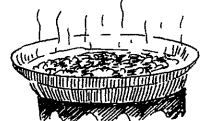


自然観察指導員講習会  
(平成9年10月10~12日)

今回、244回目は、鳳来町の愛知県民の森で開催されました。これには60名だけ参加できます。その中に、鳳来町から友の会員の小山舜二さん、当館の酒向、森下が含まれていました。研修を終え、自然観察指導員として登録されました。

きのご観覧会  
(平成9年10月19日 晴 30名参加)

「きのごを学ぶ会」にのりてしまった人を中心に、医王寺周辺でおこないました。館の職員だけで実施。きのごの発生は少なめでしたが、準備しておいた50人分のきのご汁はペロリとたいらげてしまいました。



鳳来寺山自然科学博物館

ほげがつかりたろ No.47 1997.11



オオ! マイッタ!! ケ?  
(平成9年10月25日)

新聞を見て、初めて見るきのご名に新種かなと思っ、しまいました。ヒラタケのなかまが、どこかでオオマイタケになってしまったようです。なかなかおもしろい名前です。納得してしまいそうです。命にかかぬものだと、まちがいはゆるされません。博物館が鑑定したことになっていてビックリ。冷や汁をかきました。伝聞には注意!



これからの活躍が期待されます。がんばりましょう。



バードウォッチングと巣箱づくり  
(平成9年12月13日 70名参加)

博物館から鳳来寺高校グラウンドにかけて  
双眼鏡片手に出かけました。

ヤマカ「ラ、ヒヨドリ、モズ」、  
ホオジロ、アオジ、ジョウビタキ、  
ツグミ、セウロセキレイ、  
ギセキレイ、キジバト、トビ  
ハシブトガラス、メジロ  
の13種が観察でき  
ました。

暖冬で山にエサが  
あるのか、里にまた降り  
て来ていないようでした。



山本隆先生逝く  
(平成9年12月10日)

博物館設立時から  
学術委員、顧問を  
歴任し、館の発展  
に功献されました。  
昭和2年から  
描き続けた

三輪村植物図譜(鳳来植物図譜)

は特筆される業績です。  
生涯にわたり、地元の植物を  
描き続け、特別大切にされて  
いました。原図を見た人は、誰もが  
感動します。

イタチごっこ

(平成9年12月28日)

年末、コリハウス内に侵入者がいるのを職員(酒向)  
が見つけました。小型で胴長、体色は明るい黄かっ色。  
イタチのメスのようです。

イタチは顔に似あわずと猛で、ニワトリを殺し  
たりするそうです。コリハウスと緊張した姿で、警戒  
していました。コリハウスが食べられてしまったら大変  
なので、捕えようとするのですが、逃げられてはかりで  
いこうにつかまされません。

しばらく住みついていて、何度か捕獲を試みまし  
たが、いつのまにか姿を見なくなりました。

あたたかな冬でした

冬のコリハウス

この冬は暖かだったので  
昨シーズンのように室内に移す  
必要はありませんでした。

正月も、雪も無事にのり  
こえて元気です。

教訓になった冷たい雨も  
屋根付きの止まり木のおかげで、どう大丈夫です。

今季の冬は、コリハウス内のツツジの  
枝の中がお気に入り、日中はすべ  
と片足でうす目をあけて休んでいます。

博物館学術委員会

(平成9年12月20日)

新年度の学習会、特別展などの教育普及活動等に  
ついて協議する大切な会議でした。10年度は、開館35周年  
の記念すべき年です。新事業、記念事業を積  
極的に企画しました。

冬の自然探検

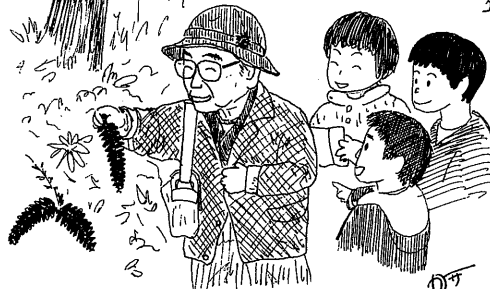
(平成10年2月8日、曇時々雪、63名参加)

今にも降りそそぐような天気の中、門谷の高徳  
林道でおこなわれました。

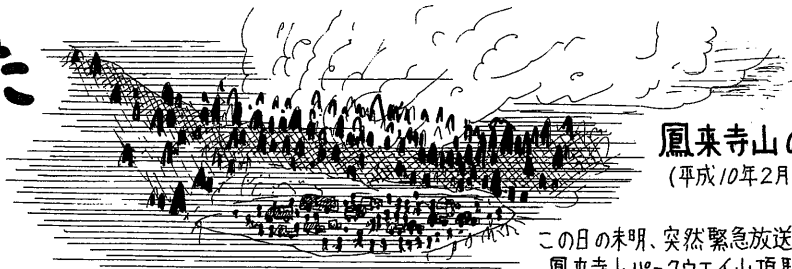
落葉樹と冬でも葉のある常緑樹、  
シタの観察には絶好の季節です。

午後は学習室で観察のまとめをしました。  
これで一年間の学習会がすべて終了。

年間で584名  
の方の参加が  
ありました。



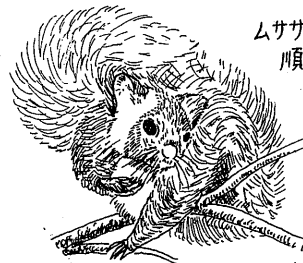
鳳来寺山自然科学博物館



鳳来寺山の火事  
(平成10年2月1日)

この日の未明、突然緊急放送が流れました。  
鳳来寺山パークウェイ山頂駐車場付近で  
火災が発生し、山へ延焼しているとのこと。急いでとび出しました。売店はすでに燃えつき、裏の  
山林に火が移っていました。風がほとんどなく、炎が広がらなかったこと、消防団の活躍で、最少限  
の被害にとどめることができました。

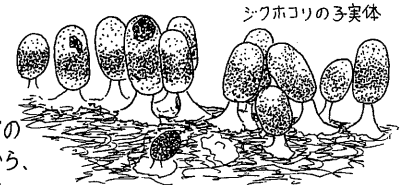
鶴吉のお正月 (平成10年1月)



ムササビの鶴吉の生長は  
順調で、12月末の体重が  
890g。大人の体に近づき  
つつあるようです。ムササビの  
性成熟は1~1.5年ですから、  
あと半年ほどで一人前です。  
職員(森下)に大型の巣箱  
ととりかえてもらい、お正月に  
は保護室にかざってあった、おそなえ  
モチをたいらげって、とても元気で。

森の魔術師「変形菌の世界」

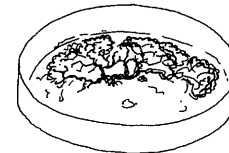
(平成10年1月27日)



国立科学博物館で、おもしろい企画  
の特別展があり、休日を利用して見学  
に行きました。

変形菌というのは、粘菌とも呼ばれ、  
アメーバのように動きまわり、キノコのように  
胞子を作る不思議な生物で、植物でも  
動物でもなく、そして菌類でもありません。  
最近の分類体系では、原生動物です。  
友の会の竹之内昭夫さんも、変形菌の  
魅力にひかれて見学に行ったそうです。

おみやげに持ち帰ってくれたモジホコリ  
の変形体は、事務室の窓ぎわで「シャーレ  
の寒天培地上」エサのオートミールを食  
べて、はいまわっています。



モジホコリ

博物館運営審議会

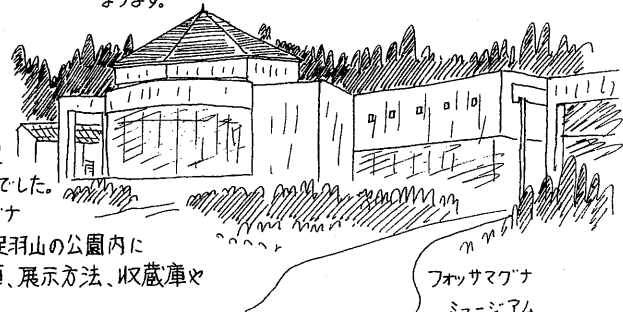
(平成10年2月16日)

平成9年度事業の状況、10年度計画について報告し、その  
内容等について審議されました。21世紀に向けての新しい  
博物館についても重要な意見が出され、取り組んでいくことに  
なります。

日本海側博物館の視察

(平成9年12月2~3日、館長、加藤)

フォッサマグナミュージアム、青海町自然史  
博物館、福井市自然史博物館が視察先でした。  
糸魚川-静岡構造線をテーマにしたフォッサマグナ  
ミュージアム、町ぐるみ博物館をうたう青海町、羽羽山の公園内に  
建ち、改築間もない福井市の博物館。運営や予算、展示方法、収蔵庫や  
研究室など、とても参考になりました。



フォッサマグナ  
ミュージアム



# 春の話題と博物館

はぴなつかたき No.49  
1998.4

館報27号完成 (平成10年3月30日)

博物館では毎年一冊、館報を発行しています。学術委員と博物館職員による調査研究や事業実績報告などを収録しています。

今回の27号は大平仁夫先生の「豊川河川敷に生息するスズメコトクシムシ類」をはじめとして、音為川の水生生物(西本いたば先生)、乳岩の植物(加藤等次先生)、湯谷6号泉の掘削データ(横山館長)、鳳来町の菌類(加藤)などです。



鶴吉の大冒険  
(平成10年4月11日)

ムササビの自然復帰を目ざして3月15日に敷地内のヒマヤスギに巣箱を掛けました。昼間だけの野外生活の始まりです。でも夜行性ですからほとんど眠ってばかりです。

桜も散りはじめたこの日の夕方、いつものように職員(森下)が迎えに行くと、枝から屋根へ、屋根から桜の木へと飛び回り、さらに電線を伝って脱走してしまいました。けんめりに追いかけて、さかしましたがついに見つけれませんでした。

いよいよお別れの時期と心に決めて博物館をあとにしました。ところが翌朝、巣箱を確認するとちやっかりとどつていて、顔を出しました。うれしいような人さわかぜな体験でした。どこで何をしていたのか、鶴吉にとっては大冒険だったにちがひありません。こんなことをくりかえしながら、自然界にもどっていくでしょう。



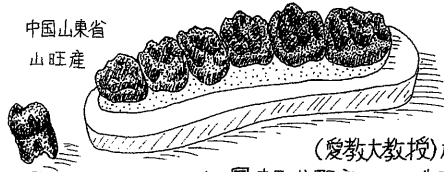
コリハズク巣箱設置  
(平成10年2月21-22、3月8日)

門谷21世紀委員会、博物館友の会の有志がおこないました。門谷の方たちは、鳳来寺山の表山を中心に、友の会は、反対側(北側)の安城農林高校演習林内に設置しました。

今年の春に訪れるコリハズクが、これに気づいて使ってくれば、皆の汗がむくわれます。



中国山東省  
山旺産



中国のヤギバク化石(複製)  
(平成10年3月7日)

当館学術委員の河村善世先生(愛教大教授)が研究用として入手して下さいました。鳳来町分野産のバク化石と比較研究する上で貴重な資料です。展示館2階に展示してあります。

45年ぶりのバク化石産地  
(平成10年3月7日)

昭和28年4月、玖老塾の分野谷で見つかったバクの上ご化石の発見者、中嶋吉一さんに、河村先生と共に、発見場所へ案内してもらいました。45年ぶりだそうです。その場所は玖老塾石(砂岩)の石切場で、今も大量のズリが残っていて、当時の様子がわかります。産地が明確になったことで、研究が進むことが期待されます。

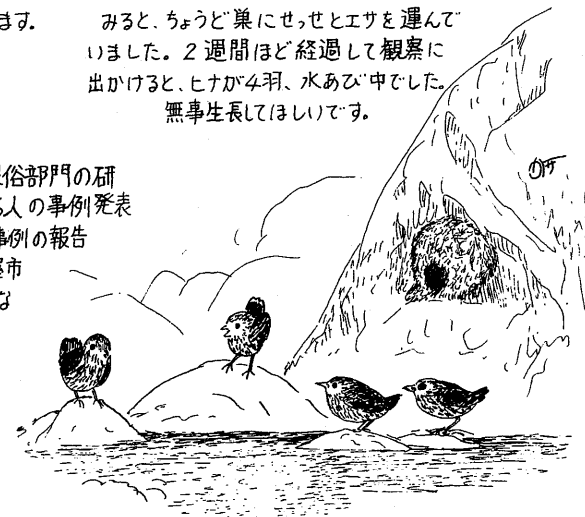


貯木場の焼却炉のコンクリートの床に落ちて血を流しているところを、峯野さんに助けられました。

体重160g(ほど)、生後2~3週間といったところです。もじもじ見つからず、博物館でひきつづき保護することになりました。出血も止まり、今は毎日元気にミルクを飲んでいきます。

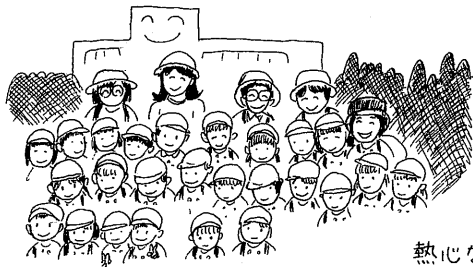
カワガラスの子育て  
(平成10年3月9日)

コケを使ってバレーボール大の巣を作ります。愛郷恩原の川合志治さんからの連絡で見に行くと、ちょうど巣にせせとエサを運んでいました。2週間ほど経過して観察に出かけると、ヒナが4羽、水あみ中でした。無事生長してほしいです。



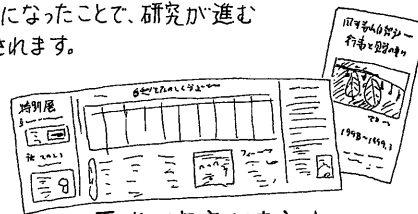
鳳来西保育園の見学 (平成10年3月10日)

お別れ遠足で鳳来寺山と博物館を訪れてくれました。保護中のムササビコリハズクに歓声をあげていました。博物館は幼い頃から何度も何度も利用してもらえることで、喜びが大きくなります。



鳳来寺高校生も見学

3月7日、鳳来寺高校の一年生全員が来てくれました。館員の説明のあと、館内を見学。すぐお隣りにある学校です。気軽に放課後博物館として利用できます。熱心な学生はいつでも歓迎します。



平成10年度行事案内でさる

今年度は開館35周年にあたります。記念の特別展やまきのこ展、年間9回の学習会など行事が一目でわかります。町内全生徒のほか、三河、遠州の全学校に配布して、利用の参考にしてもらいます。

鳳来寺山自然科学博物館


(愛知県博物館協会)  
愛博協部門別研修

2月19日、一宮市博物館で歴史民俗部門の研修会があり、2名で出席しました。6人の事例発表があり、当館職員(加藤)と活動事例の報告を担当しました。又、27日は名古屋科学館で自然科学部門がおこなわれました。アラステーション技術と展示への応用例について東医学部標本室や川崎医大の事例と、意見交換がおこなわれました。

# '98初夏の日記

## ≡50回記念特大号≡

はぴなからだより 1998.6 No. 50

 安全なマイホーム  
(平成10年4月27日)

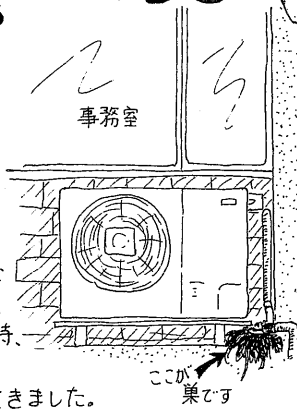
チン チンという鳴き声のキセキレイが事務室前によく来るようになったなと思っていたら、窓の下に巣を作っていました。ここなら安全です。

5月4日抱卵の親がいなくなった時、巣をのぞくと5個の卵が見えました。

16日に1羽がふ化すると次々に出てきました。

28日にはもう巣立ち。でも親は、まだせせとエサを与えていました。しばらく見えなかりと思っていた6月7日、親子で窓までやってきました。

あいさつにきたのかなー。



鳥ちがい、でもほっとけない!  
(平成10年5月15日)

「コリハズクがケガして飛べなくなっているので何とかして」という連絡が入り、新城東高校へ急行しました。

クツ箱に入れられていた鳥は、コリハズクではなく、アオバズク。教室のガラスに激突したらしく、クチバシと目が血に染っていました。

館に持ち帰り、安静にして、とりあえず様子を見ることにしました。やがてミルワームを食べるようになり、少しづつ元気になってきました。眼球内の出血も消え、保護室内を飛べるようになったので、5日後の20日に放鳥。元気に飛び去っていききました。



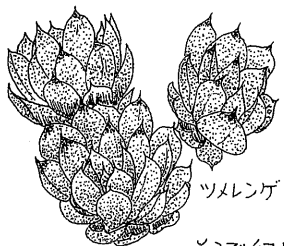
モリアオガエルの産卵  
(平成10年5月3日)

今年は春から雨が多く、牢連ダムは例年になく満々と水が貯えられています。こんな年はめずらしいのかモリアオガエルもいつもより早く産卵がはじまりました。

博物館脇の観察池では、今日までに、すでに9個の卵塊が産みつけられました。

池にはイモリがオタマシメワシをまちかまえています。これと自然のおきてです。

食いつ食われつ生物界は成りたっています。そんなドラマの一端が小さな池で見られます。



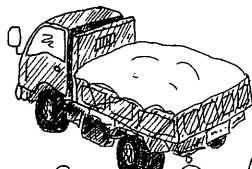
ああ 生きのびていた  
(平成10年5月20日)

ダム工事で生息地が一変してしまい

7月ツバメシジミは、もう見られないかも……。調査に出かけた館長は、学術委員の大平博士と七郷一色小学校(鈴木孝始校長)を訪ねました。

そこで幼虫と思っていた7月ツバメシジミの幼虫と成虫

を見つけました。絶滅を心配して、能登瀬の鈴木利久先生(当時)らが七郷一色小学校へ、食草のツメレンゲと共に移し、保護の対策を打って来てくれたのでした。何年も前のこと、感激です。



故藤城豊氏の資料受領  
(平成10年4月30日)

当館学術委員をつとめ、津具金山開発の功労者である藤城豊(故人)さんの岩石類の資料をダンフカー一杯いただきました。

受領については小笠原喜好さんに仲介やダンフカーなどお世話になりました。

資料には当時の金山での分析道具や金鉱石、輝安鉱、辰砂(水銀鉱)など貴重な資料が含まれています。夏の特別展で展示、紹介の予定です。



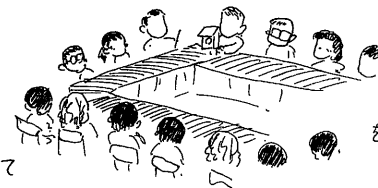
コリハズク座談会 (平成10年5月16日)

巣箱などによるコリハズクの保護活動をしている地元の方や友の会、それに尾張野鳥の会の浅沼会長はじめ10数名でおこなわれました。

県民の森の一室で、

活動内容や、コリハズクの情報交換をしました。

今後、活動者の輪を拡げていきたいです。



もう飛(トビ)べません  
(平成10年4月17日)

トビが落ちていっているというので見に行ったのは就職3日目の職員(清尾)でした。見ると重傷、翼は折れて、今にも死にそう。でもかわいそうだったのでつれて帰ってきました。一命はとりとめたものの飛ぶことは無理と獣医さん。

彼女は自宅で世話することになりましたが、トビくん

彼女に助けられたのに

プライドが高いのか無視する。逃げるで苦勞中。



地上を歩く「トビくん」

学術委員総会・友の会総会・交流会

(平成10年4月25~26日)

記念講演  
の大平先生

J-H. フェアール



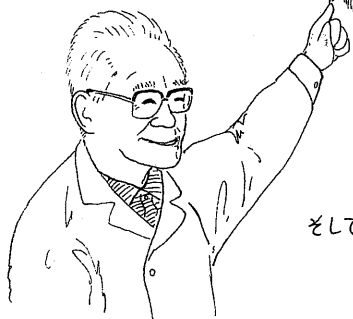
平成10年度の博物館活動の推進のため、学術部門の支援をいただいている全学術委員の先生方に集ってもらい、総会を開催しました。

そのあと、博物館友の会総会がひきつづきおこなわれました。

平成9年度会員の精励表彰、事業報告、役員改選、10年度事業計画が決まりました。

議事終了後、学術委員会動物部門主任で農学博士、

そしてゴメツキムシ研究で日本を代表する大平仁夫先生の記念講演「昆虫の世界」を全員で受講しました。↑



友の会総会にあわせて発行された「瑠璃山 No.3」(友の会報)菅谷先生の三河地震の講演、会員、職員の記事がいっぱい(85版、58ページ)

→ 続いて、恒例になった「五平もち作り」を

友の会員、学術委員いっしょになって楽しみました。

いっしょな形で味噌を顔につけて、おいしくいただきました。

夜は希望者が集い、宿泊交流会。

友の会は年令も地位も肩書も、全く関係なしです。

夜のふけるのを忘れて、ワイワイと語りあいました。

### 博物館で「仏法僧」 (平成10年5月4日～)

博物館の「コハI号」は6月5日で丸2年の滞在になりました。今年体調が良いのか、5月4日に初鳴きしてから6月20日まで毎日のように「フッポーソー フッポーソー」と鳴いています。しかも真っ昼間です。

鳴くときのポーズは右図のように首をすくめて肩をいかりし、眼をむいてノドの下をふくらませるようにします。小さな声から徐々に調子をあげるようにして1分前後鳴きつづけます。



片足立5

### オオコハズク受難と保護 (平成10年6月5日・6日)

能登瀬の宮野安良さんからコハズクの死体をひらったとの連絡でかけつけると、頭を食いちぎられたオオコハズクでした。翌日、全く同じ場所の国道で、東陽小1年の石原希一くんがオオコハズクの幼鳥を発見し、おじいちゃんの邦利さんと館までとどけてくれました。まだ飛べないヒナです。たぶん巣を何者かにおそわれ、親はむごんな姿になってしまったのでしょうか。巣立ちまで博物館で世話することにしました。

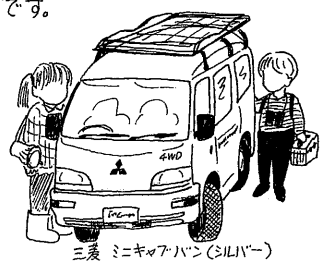


片足立5

体重110g

### 博物館の17号車だ♡♡ (平成10年5月20日)

待望の専用車が配備されました。野外調査に町中ちやうをかけ巡ります。大事に大切に使います。さっそくコハズク調査で活躍しています。山で見かけても、あやし(し)車ではないです。17号車では味けないのでミカちゃん(ミニキャブの頭文字から)とか、銀鳥号(シルバーオール号・車体色から)などと呼んでいます。良い名前を募集します。



三菱 ミニキャブバン(シルバー)

### 祝 満一歳 ガンバレ鶴吉 (平成10年6月22日)

博物館へ生まれたばかりのムササビの赤ちゃんが持ち込まれたのは昨年6月23日でした。鶴吉と名づけられた彼は、こんなにたくましくなりました。4月の大冒険以来、日中寝ぐらの巣箱に帰ってくる以外には、夜はどこかへ出掛けています。もちろん食べものはすべて自分でまかっています。体重970g。もう立派な青年に成長し、自活しています。飛膜に棒がつかさった跡のようなキズや、タニがくっついていても元気がかんばっているようです。館に来た前日を誕生日ということに決めて、職員(森下)が大珍物のオモチとサクランボで、ささやかなお祝いをしてあげました。これからの楽しみは、彼女をつれてくることと、2世が生まれることです。



タニ

キズ

### さよならBすけ (平成10年5月25日)

この日、新城の庭野小学校へおひっこし。ビービーと改名し、元気だそうです。



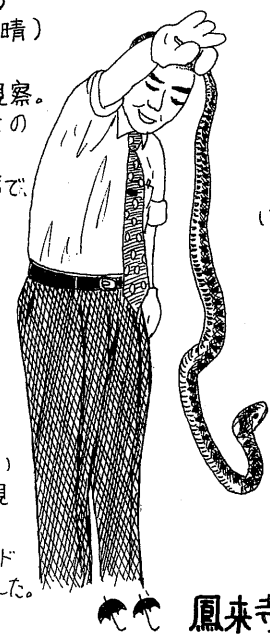
No.49参照

### 初夏の植物を調べる (平成10年5月23日、72名、晴)

林道と石段コースに別れて観察。石段コースでは110種以上の植物を観てきました。午後の高木先生の竹の皮の話で、観察の楽しさを教わりました。

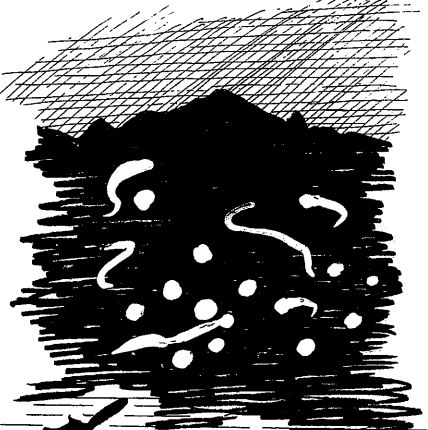
### 初夏の鳳来寺山の生きものを学ぶ (平成10年6月13日、68名、雨)

梅雨にもかかわらず熱心な参加者で、いっしょになりました。雨で野外観察は中止。館でモリアオガエル、魚、鳥、虫などの観察のあと、スライドと講話。室内でしっかりと学びました。でも外はやっぱり楽しいです。



### コハウスに「だ!」 (平成10年5月21日)

いつものようにコハズク(コハI号)をのぞきに行くと、コハウスの網の地面のあたりで「黒いものがモゾモゾ」と動いています。近づくともなほほど大きなヘビが網のところで、こんぐらうていました。ヘビが大のにかての館員(加藤)でしたが、コハズクが飲み込まれては大変と思い、勇気を出して退治することにしました。3mほどの塩ビ管をつついでころしめましたが、翌日には再び元気になって物陰にかくれていました。そこで横山館長にお願いで、つまみ出してもらう。ホッとひと安心。超特大の黒色型のヤマカガシでした。ヘビに触れるなんてスゴイ。



ムササビ

キュキュ キュルル...

ヨトカ

アオハズク

ホホッ ホボッ

ジュウイチ

ジュウイチ

ホホッ ホホッ

ツツドリ

イノシシの幼獣

(ウリンホウ)



ノウサギの赤ちゃん

### コハズク鳴き声調査隊余話 (平成10年4月21日～)

今年も昨年と同じ地域にコハズクがやってきて鳴いています。時には2羽で鳴き交わすこともあり、感激します。しかし、声が確認できずに帰ってくるの方がずっと多いのが調査の現実です。場所によっては、生き物の声すら全くしない静まりかえったところもあり、一人でいるとゾーとしてきて、逃げだしたくなることもしばしばです。反対に「仏法僧」とは聞けなくてもにぎやかなところもあります。ノウサギやイノシシの赤ちゃんと出くわしたり、ホテルの光の乱舞に迎えられることもあります。家で寝ていては味わえない感動や体験が待っています。